

UMA ABELHA NA CHUVA Carlos de Oliveira

カルロス・デ・オリヴェイラ 著／彌永史郎 訳



雨の中の蜜蜂

雨の中の蜜蜂

カルロス・デ・オリヴェイラ著／彌永史郎訳
UMA ABELHA NA CHUVA Carlos de Oliveira

著者略歴

カルロス・デ・オリヴェイラ (Carlos de Oliveira)

1921年ブラジルのパラ州ベレン市生まれ。2年後両親とともにポルトガルへ引き揚げる。1981年没。

1947年コインブラ大学文学部哲学科卒業

詩人、作家

代表作 詩集『観光』(1942),『調和の地』(1950), 小説『砂丘の家』(1943),『最果ての地』(1978) など

訳者略歴

彌永史郎 (いやなが・しろう)

1952年東京生まれ

東京外国語大学大学院修士課程終了

専攻 ポルトガル語学・文学

現職 京都外国語大学助教授

主訳書 『たったひとつのオレンジ』(彩流社),『ファルバス』(大学書林),『GHの受難・家族の絆』(共訳, 集英社)

雨の中の蜜蜂 — ポルトガル文学叢書⑥

1991年6月15日 印刷

定価はカバーに表示してあります

1991年6月30日 発行

著 者 カルロス・デ・オリヴェイラ

訳 者 彌 永 史 郎

発行者 竹 内 淳 夫

〒102 東京都千代田区富士見2-2-2

発行所 株式会社 彩 流 社

電 話 03 (3234) 5931 振替・東京 9-55239

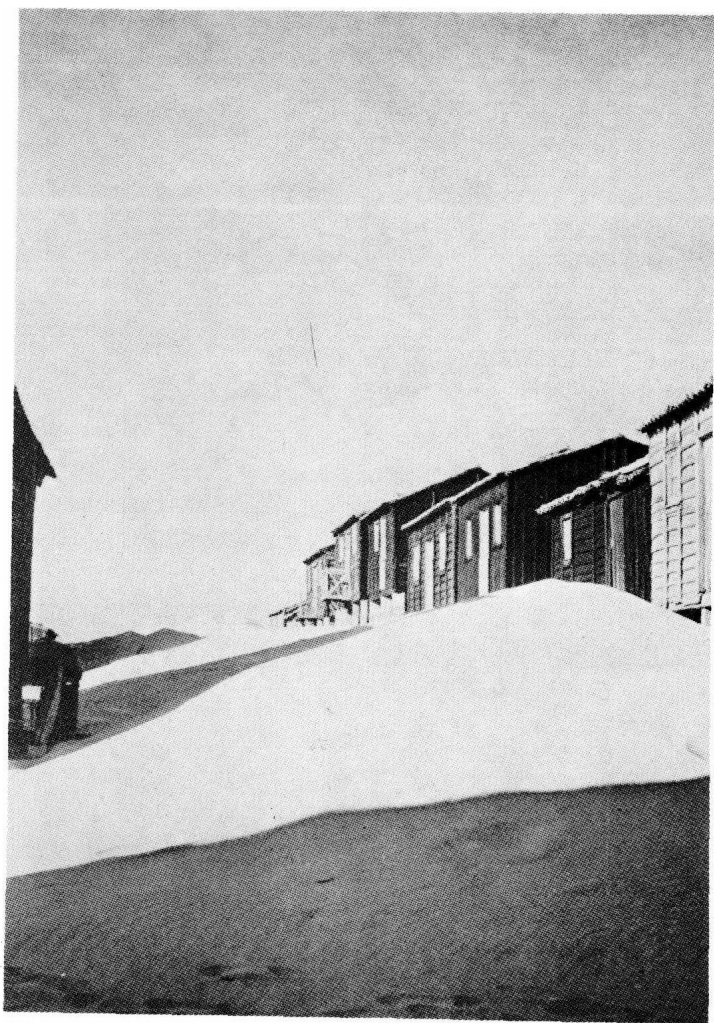
印刷 御平河工業社

Printed in Japan

製本 南青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

ISBN 4-88202-202-8



パリエイロ(納屋)

目次

雨の中の蜜蜂……………7

訳者解説……………181

訳者あとがき……………199

本文中の（ ）と＊は訳注である。

雨の中の蜜蜂

カルロス・デ・オリヴェイラ著／彌永史郎訳

十月のある日、雨の降りそぼつ寒々とした夕方の五時頃、ひとりの旅人がコルゴスの町にやって来た。モントーロ村から徒歩で泥道の悪路を踏み越えたすえ、ようやく街の安全な石畳の道にたどりついたところであった。男はでっぷりと太り背は低く、歩みはひどくのろかった。襟に狐皮のついた上着、使い古した広ぶちの黒っぽい帽子、きつめのシャツにネクタイはなしという風体にもかかわらず、清潔な手から手入れの行き届いた口髭にいたるまで、目に触れるところはすべて一分の隙もない身だしなみのよさは、やはり相当のものである。たしかに長靴は泥まみれだが、旅人がふだん泥道を歩きつけていないことは明らかだ。泥が気になるらしく、しきりに靴を石畳に叩きつけている。男には何か普通ではないところがあった。丸々と太った胴体の重みで脚は弓型に曲がり、驚鳥のように身体を左右に揺すりながら歩く。そして一歩ごとに身体が崩れていくようにみえた。息遣いは荒く歩くのに難儀している。それでもこうやって冬を思わせる寒空の下、雨に洗われ、ぬ

かるんだ二レグア〔約一〇キロ〕の道程を駆けるような勢いで歩いてきたのだった。こんなにひどい空模様だというのに、曠野ガンドラの抜け道を通してわざわざやって来たからには、よほど重要な用事があるにちがいなかった。

街の上空には、白っぽい光の帯がぐるりと弧を描いていた。それは巨大な貝殻の端の部分のようだ。そして中心に向かって次第に暗くなっていき、ついには嵐の吹き荒れる奥深い凹みへと収斂していく。今にも雨が来そうだった。風は固まっていた雲を散りぢりにして、午後になればきっと降りだすその豪雨のために通り道を開けようとしていた。

男はゆっくりと広場を横切るとカフェー・アトランティコの入り口で丁寧に靴をぬぐい店の中へ入った。腰をおろしブランディーを一杯頼み一気に飲み干した。生来何事もゆっくりの質たちの男にとって、いくらか急いであることといえはこの飲み方だけである。口を開け、そこにグラスをあてがうと一瞬不動の姿勢で構える。そしていきなりブランディーを喉の奥に一気に流しこむ。この動作を二回、三回とくり返し、金を払って店を出た。再び広場を横切り、靴の踵を地面に叩きつけるようにしてゆっくりと歩き、最後に残った靴の泥を落しながら、相変わらずの身体を左右に揺する重い足取りで「コルゴス司法区日報」の編集局へと近づいていった。それは朽ちかけたプラタナスの枯葉を引きずっていく風が、

やっとのことで男の身体を引っ張っていくようだった。

司法区日報の編集長メデイロスの事務所は、薄暗く居心地が悪かった。松材のごく普通の事務机、菓のクッションが置いてある大きな肘掛椅子が二、三脚、天井のランプのビーズで飾った笠、そして部屋の隅々に積まれた新聞の山。部屋の中は、夏の街道のように土埃の臭いがしていた。

「まあ、おかけになってください」

男は腰をおろすと財布を開き、入念に折りたたんである一枚の紙を取り出した。

「次の号に載せてもらいたいです。ま、間に合えばの話ですがね。もちろん必要なものはお払います」

メデイロスはその紙を広げ、ギターの爪のような大きな親指の爪で折り目をひと筋ひと筋のばすと読みはじめた。すると何か怖いものでも見たような目をして相手を見つめた。

「こういうものを新聞で活字になさりたいということですか」

男は無表情なままうつ向いて言った。

「そういうことです」

机の上の書類の山をまるで空気が足りないと言わんばかりに両脇に押しやると、細い鼻梁に眼鏡をかけ直し、何かの思い違いであることを祈るように、ふたたびその書きつけを読みはじめた。しかし思い違いではなかった。そこには頼りない字ではあるが、緑色のインクで驚くべき告白が確かに記されていたのである。

私こと、コルゴス郡サン・カエターノ地区モントーロ村在住、商人兼農場主アルヴァロ・ロドリゲス・シルヴェストレは、現世の人々および天にまします神の持ち物を盗み暮らしてまいりましたことを、自らの名誉にかけて誓うものであります。モントーロの聖母奉祀会会員たる折には、会員の皆様の奉納したるトゥモロコシの残余分を自分の倉へ投入したこともありました。

申し開きが許されるならば、私が店の帳場や縁日の商いで不正を働き、さらに使用人の給金や弟レオポルディーノの法定相続分をごまかして盗みを重ねてまいりましたのは、

妻マリーア・ドス・プラゼーレス・ペソア・デ・アルヴァ・サンショ・シルヴェストレの教唆によるものであったことをも、ここに誓うものであります。

私は弟レオボルディーノの代理人でありますが、弟本人に無断で相続分の松林を売却しましたところ、恥ずかしながらこのたび弟がアフリカより帰国することとなり、しるべき計算書を提示出来かねる次第であります。

主の許しはこの現世への告解によつてはじまるのであります。御父、御子、聖靈によつて、そして私を誰よりも多くお許しくださる方によつて、何卒お許しがいただけますように。

二度目に読み終えたときも最初と同じだった。口をあぐりと開けたままである。だれかが値段をいくらかごまかして商売しているらしい、ということとはわかる。聖人に奉納したトウモロコシを何俵か掠め取ったらしいことも納得できる。それに、委任状が何たるかを知りながら他人の松林をいくつか売り払ったというなら、それは魔がさしたからに他ならない。分かりきったことではないか。しかしこういうことを新聞の第一面で公に告白しようとは……正直なところメデイロスにとっては、まるで岩角に頭突きを食らわせようと

いうに等しかった。

メデイロスは再びモニター口村からやって来たこの農園主の太った顔を見つめた。眠たげで無表情のままだ。しかし敏捷というには程遠いその眼、軽くへの字に結ばれた温厚な口許、灰色になった鬢のあたりにはある厳肅な雰囲気がある。それで、内心こいつはどこにかいてあるのという結論を下せずにいた。といっても他の解釈は難しだろう。ふつうならこんな声明文をむやみやたらに公けにするものではない。事は重大で第三者を巻き込んでいるし、この男がじっさいに頭がおかしいとすれば、あとになって家族から苦情だの訂正だの面倒な問題を持ち込まれる可能性さえあるのだ。

「要するに、神の前に行く痛^う悔を公になさろうっていうおつもりですか？」

「そうです。第一面に、できれば太目の文字でお願いします」

「しかし、なぜこういうことをなさるのか、ご説明願えますか」

男は肘掛椅子のなかで座り直した。膝の上にのせた帽子を白く太い指でなでている。

「相手が神でも人間でも、きちんとしておかなければならんことがあるのです。とくに神さまに対しては」

「それはよく分かりました。そういうことはきちんとしておかねばならんと。でもそれだ

けではちょっと……」

「つまり、私のこの中で立ち回っている悪魔のやつをどうにかせねばなんのですよ。私を責め苛んでいる奴を」

司法区日報の編集者は眼鏡をはずすと、おもむろに銀製のケースにそれをしまった。

「私があなたの立場だったらどうすると思いますか。私だったら神父さまのところへ行って心の内にあるものを吐き出してしまえますがね。懺悔ってものは……」

「いや、懺悔はもう十分してあります。でも懺悔だけでは足らんですよ。この件については私も十分に考えたのだが、アベル神父さまだけでは事は済まんのですよ」

「とにかく懺悔ってものは随分と気持ちを楽にしてくれるものです。醜聞になることもありませんし」

「いや、神は曲がった線の間にもまっすぐ書く、というじゃありませんか。醜聞もまた主の所思し召しですよ」

そしてほとんど間髪を入れずに続けた。

「じゃあ、こうしていただきますしやう。次の日報の第一面に広告用の太文字で載せると、いかほどになりますかな」